

萬葉集卷四、五七一「行毛不去毛」の訓詁

萬清行

一 はじめに

萬葉集卷四、五七一番歌の第四句「行毛不去毛」の訓詁について考え、それを通じて一首全体の解釈を検討する。

(1) 月夜良し 川の音清し いざここに 行毛不去毛
遊びて行かむ

この歌は、「大宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時、府官人等餞卿筑前國蘆城驛家歌四首」という題詞によって示される四首のうちの一首である。題詞の大意は「大宰帥である大伴旅人が、大納言に任ぜられて九州の大宰府から京に帰ろうとする時に、大宰府の役人たちが、筑前國の蘆城という駅家で餞別として作った歌四首」というもの。問題の第四句は、萬葉集の最新の注釈書の一つ、岩波文庫『萬葉集(二)』では「ユクモユカヌモ」と訓読され、「いい月だ。川の音も清らかだ。さあここで都へ行く人も留まる人も楽しく遊んで帰ろう」という口語訳が与えられている。このような訓読と解釈は近年の殆どの注釈書でも同様であり、通説と認められているように思われる。

ただ当該部分は、古写本・版本では、一致して「ユクモトマルモ」という訓が与えられているものであった。ユクモユカヌモという訓は、契沖が『萬葉代匠記』(精選本)において「不去毛ハ、今按、字ニ任セテユカヌモト読ヘキニヤ」と主張し、以後多くの注釈書がこれに従っているのである。

しかし契沖より続くこの訓は、萬葉集が編纂された時代の言語と表現から考えると、適切ではないのではないかと思われる。どのような疑問があるのかを明らかにし、どのように改めればよりもとの形に近い訓になるのかを考えること、そしてそれらを通じ、この時代の言語の性質の一端を明らかにすることが、本稿の目的である。

二 ユクモユカヌモの問題

二・一 文法的問題

「行毛不去毛」に対して契沖の提示したユクモユカヌモという訓は、文法的には(動詞A(連体形)+モ+動詞A+ヌ+モ)と分析される。この形式は、『小倉百人一首』にも採られている次の有名な歌に見られるように、平安時代以降には比較的多

く見られるものである。

(2) これやこの ゆくもかへるも わかれつつ 知るも
知らぬも 逢坂の関『後撰集』雑一、一〇八九、蟬丸「相
坂の関に庵室をつくりてすみ侍りけるに、ゆきかふ人を見
て」

しかしそれはあくまでも平安時代以降のことに限られる。萬
葉集にはこの種の例は一切現れず、そればかりか「動詞（助動
詞）連体形＋モ」という形式自体殆ど見られないのである。萬
葉集には文中で用いられる係助詞のモが一四五一例存在する
（日本古典文学大系『萬葉集 四』（高木市之助、五味智英、
大野晋校註、岩波書店、一九六二）四一七五番歌頭注所引赤間
淳子氏の調査による）が、その中で「動詞（助動詞）連体形＋
モ」という構成を持つものは、当該歌を除けば、わずか八例に
過ぎない。次にその全例を挙げる（以下、巻数と歌番号（旧編
国歌大観番号）のみを掲げる用例は、全て萬葉集からのものでは
ある）。

(3) …まつろはず 立ち向かひしも（立向之毛） 露霜
の 消なば消ぬべく 行く鳥の あらそふはしに…（巻二、
一九九）
(4) …石花^せ海と 名付けてあるも（名付而有毛） その
山の つつめる海そ 富士川と 人の渡るも（人乃渡毛）
その山の 水のたぎちそ…（巻三、三一九）
(5) 来むと言ふも（将来云毛） 来ぬ時あるを 来じ

と言ふを 来むとは待たじ 来じと言ふものを（巻四、五
二七）

(6) 吾が恋は 千引きの岩を 七ばかり 首にかけむも
（頸二将繫母） 神のまにまに（巻四、七四三）

(7) 吾が心 焼くも吾なり（焼毛吾有） はしきやし
君に恋ふるも（君尔戀毛） 吾が心から（巻十三、三二七
一）

(8) この雪の 消残るときに いざ行かな 山橋の 実
の照るも見む（實光毛将見）（巻十九、四二二六）

萬葉假名で記された確実な例となるとさらにわずかで、右に
挙げた例のうち(3)のただ一例にとどまるのである。加えて、
右の諸例を一覧すれば明らかであるように、当該歌のような、
「動詞A（連体形）＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ」という形式になっ
ているものは、一例も認められないのである。

そしてそれは『萬葉集』にのみ限ったことではなく、記紀歌
謡をはじめとする他の上代の文献にも、「動詞A（連体形）＋
モ＋動詞A＋ヌ＋モ」の確実な例は存在しない。このことは、
当該歌の「行毛不去毛」をユクモユカヌモと訓む上で、決定的
な障碍となるであろう。

しかも、先に平安時代以降には認められると述べた点につい
ても、重大な注意を必要とすることがある。それは、平安時代
終わりごろまでは、この表現が用いられるのがごく一部の語に
限られることである。具体的に言えば、「知るも知らぬ
も」という、動詞「知る」を用いたものしか見られないのであ
る。例えば先に挙げた(2)においても、「知るも知らぬも逢

坂の関」という表現であつたことを注意しておきたい。電子版の『新編国歌大観』を用いて、平安時代の終わりごろ（一一〇〇年を一応の下限とした）までのこの形式の例を調べると、「知るも知らぬも」が十七例存在する。これに対し、「知る」以外の動詞を用いるものは次に例を挙げる二例にすぎない。

（散るも散らぬも）

（9）山はるけ かすみのなかの さくら花 ちるもちらぬも 見えぬけふかな（『安法法師集』八一「ひんがし山の花をみて」）

（守るも守らぬも）

（10）小山田の もるももらぬも よの人の すべてはかりの やどりなりけり（『和泉式部集』三五七）

また散文においては、国歌大観・日本古典文学大系・新編日本古典文学全集の電子化されたデータを利用して検索する限り、そもそも用例があまり多くないが、その数少ない例も（11）や（13）、（15）のような「知るも知らぬも」の例が過半を占めることが知られるのである。

（11）…すぎにしなつのあせもよに、しるせることばをこなれど、しるもしらぬもみなひとの、なをよしただともうすをたのみて、たてまつるべしとはべるなるべし。（『三条左大臣殿前裁歌合』九十三番歌詞書）

（12）…あはれ、世中はさがにのいやしきもたふときも、はるのたのすくもすかぬも、いひせめては、おなじみやま

のくもかすみとのぼりぬるをやといへる事どもを、又あるふやわらはのあざな聖寂といふ人、…（『惠慶法師集』二百六番歌詞書）

（13）…よさのうみのあまのはしだてわたりより、なかたえてほどへにけるといひをこし、しるもしらぬも、みにもめにも、をかしきときかせ、おもしろしとみせて、ころのうちにおもひけることのはにあらはし、おもひつつへにける恋を、うたのうちにそなへたる…（『好忠集』四百八十四番歌左注）

（14）御共に、世に残るなく、君達の殿上したるもせぬも、藏人五位ども仕うまつれり。（『栄花物語』卷四十、紫野）

（15）このさとは、よろづのまらうどあつむるほうしせうとのかたはらなれば、たよりにはしるもしらぬもうちおとなふに、とほたあふみのぜじのりしげとか、ゆあみにきたる、かくいひたる（『出羽弁集』十六番歌詞書）

これらは電子化された資料を中心とした調査であるから、まだこれ以外にも多くの未調査の資料があるであろうし、そもそも散文に例が少ないということの意味も考えねばならない。しかし全体の傾向を大づかみに理解するには十分ではないか。平安時代の「動詞A（連体形）+モ+動詞A+ヌ+モ」という形式は、和歌においても散文においても、主に「知る」という動詞のみが用いられ、それ以外の動詞には及ばなかったのである。管見では、この形式が他の動詞に使用範囲を拡張してゆくのは、鎌倉時代の初期、千五百番歌合などにおいてである。

(16) うの花のかはらぬ色を なごりにて いるもいらぬも 在明の月『千五百番歌合』夏一、六五二、保季朝臣

(17) 木の葉ちる みやまのおくの しぐれこそ ふるも 袖ぬらしけれ『千五百番歌合』冬一、一六八五、寂蓮

(18) みな人の 世にふる道ぞ あはれなる おもひいるも おもひいれぬも『千五百番歌合』雑一、二七〇三、左大臣

以上のことから、少なくとも文法的観点から考えて、当該部分に「行くも行かぬも」という訓を与えるのは難しいと言わざるを得ないのではないだろうか。

二・二 解釈上の問題

ここでもう一つ触れておきたいのは、当該歌の解釈との関わりについてである。

〔動詞A（連体形）＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ〕の形式は萬葉集には他に例がないが、同じ形式の平安時代以降の例から、体言的な要素の並列と理解される。既に挙げてきた歌を例として、具体的に確認しておきたい。

（知るも知らぬも）

（2）これやこの ゆくもかへるも わかれつつ 知るも 知らぬも 逢坂の関『後撰集』雑一、一〇八九、蟬丸「相

坂の関に庵室をつくりてすみ侍りけるに、ゆきかふ人を見て」

（散るも散らぬも）

（9）山はるけ かすみのなかの さくら花 散るも散らぬも 見えぬけふかな『安法法師集』八一「ひんがし山の花をみて」

（守るも守らぬも）

（10）小山田の もるももらぬも よの人の すべてはかりの やどりなりけり『和泉式部集』三五七

（2）は「これが、まさしく、行く人も帰る人もここで何度も別れ、知っている人も知らない人もここで何度も逢うという逢坂の関なのだなあ」、（9）は「山ははるかで、霞の中の桜の花は、散っているのも散っていないのも見えない今日であることよ」、（10）「小山田を守るのではないが、守る人も守らない人も、世の人の全てはこの世を假の宿りとしていのである」といった大意であり、「動詞A（連体形）＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ」の部分は「ゝする人もしない人も、どちらも…」という意味を持つものようである。

ここに挙げたのは三例だけであるが、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』は、一〇九六番の歌「つくはねの峯のみぢばおちつもりしるもしらぬもなべてかなしも」の注の中で、「知るも知らぬも」の表現を取り上げ、『国歌大観』に現れる「知るも知らぬも」の用例を精査して、「すべて「知る人も知らぬ人も」の意であつて」と述べている。もちろん（9）「散るも散らぬも」のような例もあるから、これを「動詞A（連体形）＋モ、

動詞A十ヌ十毛」の全てに及ぼすことは許されまい。しかしその「散るも散らぬも」にしても、「散る人も散らない人も」ではないものの、「散る花も散らない花も」というような意味であつて、この形式が、「くする何かも、くしない何かも」という、体言的な要素を並列するものであることは確実である。

以上述べたことを当該歌に当てはめて考えてみると、「行毛不去毛」を「行くも行かぬも」と訓んだ場合、それは、「行く人も行かない人も」という意味を表すことになるであらう。これは、これまでの注釈書で示されてきた解釈にも合致するものであり、問題はないように思える。ところが、この歌の第三句に用いられているイザ（第三句は「率此間」という表記であるが、「率」をイザと訓ずる例は萬葉集中にこの例のほか五例が認められており、それを根拠にこの例もイザと訓ずるものと認める）の用法から言えば、そのような「行く人も行かない人も」という解釈は異例であることを、付言しておきたい。というのは、イザの後にそのような動作主体を表す語が現れる例は、萬葉集には存在しないのである。イザの用例は萬葉集に二十五例、うち動作主体を明示するものは二例に過ぎず、しかもいずれもイザよりも前にハで示されている。

(19) 玉守に 玉は授けて かつがつも 枕と吾は いざ
二人寝む(枕与吾者 率二將宿)(巻四、六五二)

(20) 天の川 波は立つとも 吾が舟は いざ漕ぎ出でむ
(吾舟者 率湧出) 夜の更けぬ間に(巻十、二〇五九)

このほか、次のような「いざ子ども」の例が六例存在する。

ただしこれは、動作の主体ではなく、呼びかけを表すものと考えられるべきであらう。またこの呼びかけの対象となるのは、萬葉集では「子ども」に限られる。

(21) いざ子ども(去来子等) 早く大和へ 大伴の御
津の濱松 待ち恋ひぬらむ(巻一、六三)

(22) いざ子ども(伊射子等毛) たはわざなせそ 天地
のかためし国そ 大和島根は(巻二十、四四八七)

このようなイザと動作主体との関係は、記紀歌謡まで範囲を広げて同様である。次に挙げる例の「吾君」あるいは「子ども」は、いずれも呼びかけと判断されるものである。

(23) いざ吾君(伊装阿藝) 五十狭茅宿禰 たまきはる
内の朝臣が 頭椎の 痛手負はずは 鴉鳥の 潜きせな
(日本書紀歌謡、二九)(古事記歌謡三八に異伝がある)
(24) いざ吾君(伊装阿藝) 野に蒜摘みに 蒜摘みに
我が行く道に 香ぐはし 花橘 下枝らは 人皆取り 上
枝は 鳥居枯らし 三栗の 中つ枝の 含隠り 赤れる嬢
子 いざさかば良な(日本書紀歌謡、三五)(古事記歌謡
四三に異伝があり、該当部は「いざ子ども(伊邪古杼母)」
という本文になっている)

一方次の例の場合は、「闘ふ」の主体となる「吾は」が明示されているものの、それは倒置された位置にあり、今問題にしている「イザここにユクモユカヌモ遊びて行かむ」と単純な比

較はできない。

(25) 彼方の あらら松原 松原に 渡り行きて 櫓弓に
まり矢を副へ 貴人は 貴人どちや 親友はも 親友ど
ち いざ^あ闘はな我は^は (伊装阿波那和例波) たまきはる
内の朝臣が 腹内は 小石あれや いざ^あ闘はな我は^は (伊装
阿波那和例波) (日本書紀、二八)

しかし少なくとも、当該歌のような「イザ＋動作主体＋動詞」という語順を持つような例が、上代に認められないということとは、注目してよいと思われる。

つまり、「行毛不去毛」を「行くも行かぬも」と訓み、「さあここで都へ行く人も留まる人も楽しく遊んで帰ろう」と解釈すると、以上のイザに関する語順の実例から見て異例になつてしまふのである。もちろん、それはあくまでイザ自体の例が少ないことの結果に過ぎないかもしれない。イザは「二人称に対して自己と共なる行動を詠え望む」あるいは「相手に与同をうながす」(いずれも内田賢徳「イザワ攷」)というような意味を持つとされるものであるから、如上の解釈は少なくとも意味の上で大きな破綻をもたらすものでないとも言えよう。しかし実例を重視する立場からいえば、そもそも萬葉集に他に例を見ない〔動詞A(連体形)＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ〕を用いていることから、やはり別の訓・別の解釈を考えるべきではないかと思う。

三 ユクモトマルモの問題

「行毛不去毛」に対して与えられる訓として考え得る可能性の一つは、古写本・版本の通りに、ユクモトマルモと訓むことである。しかしこの可能性も認めることはできないことを述べておきたい。二・一節でも触れたように(動詞(助動詞)連体形＋モ)という形式がそもそも萬葉集に殆ど見られないことに加え、「不去」をトマルという語の表記に使うことはないからである。

萬葉集総索引漢字篇によれば、「去」は、正訓字としては、動詞イヌ・サル・ユクおよび助動詞ヌの表記に用いられている。もちろん、正訓字をどのように訓むかということは、究極的には決定不可能な問題である。ただ「去」に限って見れば、「去」を用いる歌の中に、同一歌の異伝や類歌、また類似する語句を含んだ、假名書きの歌が存在するものがある。そしてそれらとの比較を根拠に、動詞イヌ・サル・ユクおよび助動詞ヌを、「去」文字の正訓と認めることができるのである。実際に比較して考察できるのは次のようなものである。

イヌ

(26) 相見ては 千歳やいぬる (千歳八去流) 否をかも
吾やしか思ふ 君待ちがてに (巻十一、二五三九)

(27) 相見ては 千歳やいぬる (千等世夜伊奴流) 否を
かも 吾やしか思ふ 君待ちがてに (巻十四、三四七〇)

サル

(28) 春されば (春去者) 花咲きををり 秋づけば 丹
のほにもみつ (巻十三、三二六六)

ヌ

(29) 山城の 恭仁の都は 春されば(春佐礼播) 花咲
きををり 秋されば 紅葉にほひ…(巻十七、三九〇七)

(30) 青柳 梅との花を 折りかざし 飲みての後は 散
りぬともよし(知利奴得母與斯)(巻五、八二二)

(31) 酒杯に 梅の花浮かべ 思ふどち 飲みての後は
散りぬともよし(落去登母与之)(巻八、一六五六)

ユク

(32) 白妙の 藤江の浦に いざりする 海人とか見らむ
旅行く吾を(旅去吾乎)(巻三、一二五二)

(33) 白妙の 藤江の浦に いざりする 海人とや見らむ
旅行く吾を(多妣由久和礼乎)(巻十五、三六〇七)

(34) 草枕 旅行く君を(客去君乎) 人目多し 袖振ら
ずして あまた悔しも(巻十二、三一八四)

(35) 草枕 旅行く君を(多妣由久吉美乎) 幸くあれと
いはひへす多つ 吾が床の辺に(巻十七、三九二七)

簡単に説明を加えておくと、(26)と(27)は、全体が同一
歌の異伝であり、(27)の假名書きから(26)の「去流」をイ
ヌルと訓むことは疑われない。(28)と(29)は「春されば花
咲きををり」の部分、(30)と(31)は「飲みての後は散りぬ
ともよし」の部分がそれぞれ共通しており、それらに基づいて
「春去者」「落去」の訓みを確定できるものである。ユクにつ
いては、本稿で問題にしている語であるから慎重を期して二例
挙げたが、(32)と(33)はほぼ同一歌の異伝であり、(32)の
「旅去」の訓は(33)の「多妣由久和礼乎」から決定すること

ができるものである。また(34)と(35)はやや一致部分が少
ないが、「草枕旅行く君を」の部分が同一であると見て、そこ
から「客去」はタビユクと訓むものと考ええる。以上のように、
「去」という文字は、イヌ・サル・ヌといった語に加え、ユク
という語の正訓字として使われていることが明らかである。少
なくとも、そのように訓ずる確実な例があることは、疑われな
いものと思われる。

一方、「不去」をトマルと訓ずる、あるいはその蓋然性の高
いものは認められない。萬葉集には「不去」という表記が十二
例あって、全ての諸本・注釈書等を確認したわけではないが、
おおむね九例はサラズ、三例がユカズと訓ぜられている。また
トマルという語は、集中に数例認められるが、それと対になる
語は次の例のようなイヌが多いようであり、ユクと対になる例
は見つからない。この例は、「印南の川」の「いな」という音
が序になって、イナバが導かれていると見られるものである。

(36) 明日よりは 印南いなんの川の 出でていなば(出去者)
とまれる吾は(留吾者) 恋ひつつやあらむ(巻十二、
三一九八)

このように「去」という文字、あるいは「行毛不去毛」全体
から見た「不去」という表記に対して、トマルという訓は、相
当考えにくいものと言わねばならない。

それでも、もしもユクモトマルモという訓が、萬葉集におい
てしばしば用いられるごく一般的なものであるならば、「行毛
不去毛」のような簡略な表記でそのように読ませることもあり

えたであろう。例えば萬葉集には実際に、非常に簡略な表記で表された次の(37)のような例がある。しかしそこで、たとえば四句めの「立座」を「たちてもゐても」と訓むことは、その次に挙げた(38)や(39)のような歌の「たちてもゐても」から「君をしそ思ふ」に続く例からの類推があつて初めて可能になるのではないだろうか。つまり簡略な表記は、比較的固定した類型があつて、そこからの推測が可能であるときに初めて、解説可能な表記として成立しうるのである。

(37) 春楊 葛山 發雲 立座 妹念(はるやなぎ かづらきやまに たつくものたちでもゐても) いもをしそおもふ (卷十一、二四五三)

(38) 秋されば 雁飛び越ゆる 龍田山 立ちても居ても(立而毛居而毛) 君をしそ思ふ(卷十、二二九四)

(39) 遠つ人 狩道の池に 住む鳥の 立ちても居ても(立毛居毛) 君をしそ思ふ(卷十二、三〇八九)

しかし当該歌について言えば、先に例を挙げて説明したように、萬葉集には「動詞(助動詞)連体形+モ」という形式自体殆ど見られないのである。そういうめったに見られない形式は、他に読みの可能性がなければともかく、原則的には一文字一文字を誤読の恐れのないように表されるものであり、簡略に表すことは許されないのではないかと思われる。そうするとユクモトマルモは、文法面からも表記の原則の面からも、許容できない訓であると言わざるをえないのである。

四 ユキモユカズモの可能性

ここまで見てきたように、従来当該部分に与えられてきた訓は、ユクモユカヌモにせよユクモトマルモにせよ、文法面あるいは表記の原則の面から、萬葉集の訓としては認め難いものであつた。それでは当該部分は、どのように訓ずるのが妥当なのであるか。本稿はここで、「ユキモユカズモ」という訓を提案したい。

四・一 「動詞A(連用形)+モ+動詞A+ズ+モ」形式の文法的意義

萬葉集には、「動詞A(連用形)+モ+動詞A+ズ+モ」という形式を持つ例が、数例存在している。確例のものは、αとして挙げる次の三例である。

(α)

(40) 小山田の 池の堤に 刺す柳 なりもならずも(奈良毛奈良受毛) 汝と二人はも(卷十四、三四九二)

(41) ::はしきよし その妻の子と 朝夕に 笑みも笑まずも(恵美々恵末須毛) うち嘆き 語りけまくは::(卷十八、四一〇六)

(42) ::天つ神 あふぎ乞ひ袴み 地つ祇 伏して額つき かからずも(可加良受毛) かかりも(可賀利毛) 神のまにまと 立ちあさり 我乞ひ袴めど::(卷五、九〇四)

一つずつ解説する。(40)「なりもならずも」は、「山田の池の堤に挿す柳のように、うまく行っても行かなくても、あなたと二人なのだよ」(『新大系』)という意味であろう。この形式は「くしてもしなくても、どちらでも…」といった意味に理解されるものである。(41)「笑みも笑まずも」は、「…愛しいその妻と、朝も夕も、微笑んでいる時もそうでない時も、ため息をついて語ったことには…」のように解釈される。文法的意味は(40)と同様である。なおこの「恵美々恵末須毛」は、表記のとおりにエミミエマズモという訓みとなるが、そのような訓みが許容できないこと、ここには何らかの誤字があり、本来はエミモエマズモを表すものであったと考えられること、などは、拙稿「恵美々恵末須毛」本文批判で述べたところである。(42)の「かからずもかかりも」は、前の二例とは順序が逆で、「動詞A(連用形)＋ズ＋モ＋動詞A＋モ」という形式であるが、「天つ神をふり仰いで祈り、国つ神に伏して額づき、治らないのも、治るのも、どちらも神の御心のままだと、取り乱して、祈りに祈ったけれども、…」と、やはり「くしてもしなくても、どちらでも…」と解釈されることから、語順は異なるものの、同種の例と判断して良いであろう。

このように「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」は、「くしてもしなくても、どちらでも…」という意味を持つようである。そしてそのような形式と意味との対応に基づく、次にβとして挙げる五例も、確例ではないが、「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」で読んでよいかと思われる(なお、先のαの三例とこのβの五例とを合わせると、現在この形式で読まれている、萬葉集中の全用例となる)。

(β)

(43) …天雲の そくへの極み 天地の 至れるまでに
杖つきも つかずも行きて(杖衝毛 不_レ衝毛去而) タ
占問ひ 石ト以ちて…(巻三、四二〇)

(44) 杖つきも つかずも吾は(杖衝毛 不_レ衝毛吾者)
行かめども 君が来まさむ 道の知らなく(巻十三、三
三一九)

(45) 梅の花 折りも折らずも(折毛不_レ折毛) 見つれ
ども 今宵の花に なほ如かずけり(巻八、一六五二)

(46) 時ごとに いやめづらしく 咲く花を 折りも折らずも(折毛不_レ折毛) 見らくしよしも(巻十九、四一六七)

(47) うつせみは 恋を繁みと 春まけて 思ひ繁けば
引きよちて 折りも折らずも(折毛不_レ折毛) 見るごと
に 心なぎむと…(巻十九、四一八五)

(43) (44) はいずれも「杖突きも突かずも」と訓ぜられる例であるが、(43)は「…天雲のたなびく遙かの果て、天と地の接する地の果てまで、杖をついてもつかなくとも何としてでも行つて、夕占で占つたり、石占の石を持ってみたり…」、(44)は「杖を突いても、突かなくても、何としてでも私はお迎えに行きたいのですが、君が帰って来られる道がわからない」という意味であろう。また(45) (47) はいずれも「折りも折らずも」という訓を持ち、それぞれ(45)「梅の花は、折つて見たり、折らずに見たりしたけれども、今夜の花にはとても及び

ません」、(46)「季節」ごとにますます目にも新たに咲く花を、折っても折らないでも、見るのは心地よいものだ」、(47)「人の身は恋が多いので、春になっても思いが頻りなままに、枝をたぐりよせて折ったり、あるいは折らないまでも、ともあれ見るたびに恋心は慰められるだろうと、…」のように解釈されよう(以上βの解釈は全て『新大系』による)。いずれも、「」してもしなくても、どちらでも…」という意味を持つものであり、αに見た例から考えれば、「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」という訓が穩当であるように思われる。逆に「杖突くも突かぬも」「折るも折らぬも」のような「動詞A(連体形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」の形式は、意味の上で「杖を突く人も突かない人も」「折る人も折らない人も」ようになって、歌全体の整合性がとれなくなってしまう、妥当な訓とは言えないだろう。

ここで注目したいのは、このβの諸例が、外形上「漢字A＋モ＋不＋漢字A＋モ」という構成を持つことである。その外形を持つものが、「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」という訓を持つということは、逆に言えば、「動詞A(連体形)＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ」という訓(具体的には「杖突くも突かぬも」や「折るも折らぬも」のようなもの)は持ちにくいということにもなるであろう。同じ外形を持つものに、読み方と意味が異なる二つの訓があることは、表記体系として合理的でないからである。ましてこの形式「動詞A(連体形)＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ」は、本稿で繰り返し述べてきたように、萬葉集中に確実な例は一例も存在しないものである。そうすると、当該歌の「行毛不去毛」も、「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A

＋ズ＋モ」の形式、すなわちユキモユカズモと訓ずるのが良いのではないかと思われてくる。

四・二 「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」形式の生産性

しかも、先の「動詞A(連体形)＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ」が、平安時代以降ある時期まで固定した例しか持たぬものであったのに対し、この「動詞A(連用形)＋モ＋動詞A＋ズ＋モ」は、平安時代以降にもある程度のバリエーションを持つ形式である。いくつか、用いている動詞の異なる例を挙げる。

(48) をふのうらに かたえさしおほひ なるなしのな
りもならずも ねてかたらはむ 『古今集』東歌、一〇九
九「伊勢うた」

(49) をみなへし をりもをらずも いにしへを さらに
かくべき ことならぬかな 『伊勢集』三四七

(50) 行ききは ありもあらずも 時鳥 啼くここにてを
ききてくらさん 『貫之集』三八三「天慶二年四月右将
軍殿御屏風の歌廿首」「をとこ山里に行くついでに、木の
本に時鳥をさく」

(51) 見もみずも たれとしりてか こひらるる おぼつ
かなさの けふのながめや 『大和物語』二七七、第百六
十六段

(52) あづさゆみ ゆづかあらため なかひさし ひかず
もひきも きみがまにまに 『猿丸集』二九「あひしれり

ける女、ひさしくなかつたえておとつれたりけるによみてやりける」)

(53) みわたせば くれもくれずも さほやまの もみぢも秋の こころなりけり『道済集』二二〇「くれのあき」

(54) いまさらに よりもよらずも しらなみの あはあはしくも うらむなるかな『左兵衛佐師時家歌合』三二、すけあきら

(48) は「おふの浦に片方の枝が伸び拡がり一面に覆つて実の成るあの梨じゃないが、成るも成らぬも、寝て語りあつてみようよ」ということで、「なりもならずも」は「うまくいつてもいかなくても、どちらでも…」という意味と考えられる。(49) は、「をみなへしをりけむえだのふし」ことにすぎにし君を思ひいでやせし」という、昔の恋を思い出すという歌に対する返しで、「女郎花を折つても折らなくても、どちらでも、昔のことを今さら心にかけるものではございません」という意味。(50) 「行き先があつてもなくても、ホトトギスが鳴く」ことで、その鳴き声を聞いて暮らそう」。(51) 「見たにしても、見ないにしても、わたくしをだれと思つて恋い慕いなさるのですか。それもご存じないのでしたら、今日の物思いとやらもたよりないことです」。以下歌全体の解釈は省略するが、いずれも「しとしてもしなくても、どちらでも…」という意味を持つことは疑われまい。(動詞A(連用形)+モ+動詞A+ズ+モ)の形式は、奈良時代・平安時代を通じて、一定の生産性を保つて使われていたのである。これらの例と照らしあわせれば、当該歌をユキモユカズモと訓むことも、相当の説得力を持つものではあるまい

か。

ただし当該歌の表記は、「行毛不去毛」というものである。

それは、図式化すれば(動詞漢字A+モ+不+動詞漢字B+モ)のようになるものであり、βに挙げたような、「(動詞漢字A+モ+不+動詞漢字A+モ)」とはわずかに異なっている。とは言ふものの、先に挙げたように、「去」はユクという訓を持つものであり、言うまでもなく「行」も同じくユクという訓を持つ。常識的な訓であり、敢えて論証を必要とすることでもないだろうが、それは例えれば次のような例から実証可能である。

(55) あしひきの 山行きしかば (山行之可婆) 山人の

吾に得しめし 山づとそこれ (巻二十、四二九三)

(56) あしひきの 山にゆきけむ (山尔由伎家牟) 山人の 心も知らず 山人や誰 (巻二十、四二九四)

(57) 玉梓の 道に出で立ち あしひきの 野行き山行き

(野行山行) にはたづみ 川行き渡り… (巻十三、三三三九)

(58) 忘らむて 野行き山行き (努由伎夜麻由伎) 吾来れど 吾が父母は 忘れせぬかも (巻二十、四三四四)

最初の二例は、四二九三と四二九四という隣接する二つの歌がそれぞれ「山行」「山尔由伎」という表記を持つており、「行」をユキと訓むことは確実であろう。その次に挙げた二例も、「野行き山行き」という一連の成句であろうと判断され、「行」の訓がユキであることは疑われない。

さらに、次の例では、当該歌と同じく、「行」という表記と

「不去」という表記が対応するものとして示されている。

(59) 吾が宿の 君まつ樹に 降る雪の 行きには行か
じ(行者不_レ去) 待ちにし待たむ(巻六、一〇四二)

この例では「降る雪の」までが「行き」を導く序であろうから、「行」をユキと訓むことには疑問の余地がない。また第五句の「待ちにし待たむ」が「待つ」という同じ動詞を二回重ねて使っていることを考慮すれば、第四句もそれと同様に、「行く」という同じ動詞を二度繰り返して用いていると考えてよいであろう。つまり、「行きには行かじ」という訓はきわめて蓋然性の高いものと考えてよいと思う。その表記に、「行」と「不去」とが用いられているのである。

そうすると、「行毛不去毛」という表記も、βのグループに見られた、「動詞漢字A＋モ＋不＋動詞漢字A＋モ」という図式に準ずるものとして考え、ユキモユカズモという訓を与えてよいと思われるのである。

四・三 解釈面からの確認

以上検討してきたように、当該歌の「行毛不去毛」は、文法と表記の原則からすれば、ユキモユカズモという訓を与えてよいと考えられる。それではその訓は、歌全体に整合的な解釈をもたらすだろうか。

これまでの論を総合すれば、当該歌の「行毛不去毛」をユキモユカズモと訓むとき、その解釈は「行っても行かなくてもど

ちらでも」といったものになるであろう。歌全体の中に当てはめてみれば、「月がよい。川の音もはつきり聞こえる。さあここで、行っても行かなくてもどちらでも遊んでいこう」のような解が得られる。ユクモユカヌモと訓んだ場合と、それほど大きな違いがあるとは言えないが、それは逆に言えば、解釈上大きな不都合が生じないということでもあるのである。

また、二・二節で検討したイザとの関係から言えば、ユキモユカズモの場合は、イザの呼びかけの対象は漠然としたその場の人々であって、明示的には示されていないことになる。そのようなその場の不特定の人々に、「行くのでもそうでなくとも、ここで遊んで行こうではないか」と呼びかけていることになるのである。そしてこちらのほうが、ユクモユカヌモと訓ずるよりも、萬葉集のイザの用法としては穏当であると言つてよいように思う。つまり、イザの側から見ても、ユキモユカズモという訓が支持されるのである。

五 むすびに

以上本稿は、萬葉集巻四、五七一番歌の訓読と、そこから派生する解釈の問題について、考えを述べた。それは、萬葉集の、あるいは当該歌の解釈を、大きく展開するものとは言えないかもしれない。しかし本稿はその考察の過程で、二つのことを明らかにし得た。一つは「動詞A(連体形)＋モ＋動詞A＋ヌ＋モ」という形式が萬葉集の中には確実な例を持たないことであり、もう一つは平安時代以降にも動詞「知る」を用いた「知るも知らぬも」に用例が偏ることである。その一方で、「動詞A

〔連用形〕＋モ＋動詞A＋ズ＋モ〕という形式であれば、萬葉集中に例が見られ、平安時代以降にも生産性を持って用いられていることも明らかにした。そしてもしも本稿の主張のとおり、当該歌がユクモユカヌモではなくユキモユカズモと訓まれるならば、萬葉集における文法的な例外であったものが、実は例外ではなかったということになる。本稿は瑣末な考証であるかもしれないが、そのような細部の地道な訓詁を通して、萬葉集の言語と表現を研究する基礎を固めることが、古代の人の心に近づく迂遠ながらも確実な道であることを強調して、むすびとしたい。

〔参考文献〕

内田賢徳「イザワ攷」(西宮一民編『上代語と表記』おうふう、二〇〇〇年)、後『上代日本語表現と訓詁』(塙書房、二〇〇五年) 所収

片桐洋一校註『後撰集』岩波書店、一九九〇年

佐竹昭広「萬葉集本文批判の一方法」『萬葉』第四号、一九五二年七月。後『萬葉集校書』(岩波書店、一九八〇年) 所収

佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注、新日本古

典文学大系『萬葉集 一〜四』岩波書店、一九九九〜二〇〇三年

竹岡正夫『古今和歌集全評釈・古注七種集成』右文書院、一九七六年
萬清行「恵美々恵末須毛」本文批判『国語国文』第七十九卷第二号、二〇一〇年二月

〔引用文献〕

栄花物語 日本古典文学大系『栄花物語 上・下』松村博司・山中裕、

岩波書店、一九六四〜五年

萬葉集 『萬葉集本文編』(旧版) 佐竹昭広・木下正俊・小島憲之、塙書房、一九六三年(萬葉集からの用例は、注目部分以外は適宜表記を改めた)

萬葉代匠記(精選本) 『契沖全集』久松潜一監修、岩波書店、一九七三〜六年

その他の和歌の用例は全て『新編国歌大観』(角川書店、一九八三〜九二年)による。

(つた きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)